

人権コラム「部落解放月間に寄せて」

日南町人権センター(No.21)

妄信、過信という加害

毎年7月10日から8月9日は「部落解放月間」です。同和対策事業特別措置法が昭和44年の7月10日に施行されたことを記念して定められたものです。部落差別について、あらためて考えていただくという期間です。

【部落差別は今も日本の課題】

部落差別という人権課題は、日本においては長く複雑な歴史を込めて最も重要な課題だと考えています。現代は様々な人権課題が認識されていますが、日本に住む私たちにとって、傍観者と評論家であるだけではすまない課題が、部落差別だと思っています。本コラムは人権について考えていただくきっかけになればと、いろいろなテーマで、諸外国のことなどもあれこれ書いています。もしも本コラムから人権に関心を持っていただけたら、部落差別問題にも同じ感覚で向かい合ってみていただきたいと思います。

【最近の報道から見えた事例】

「部落差別は過去の話、いまさら長々と話されてもやれんぞ」というのは何度も突き付けられる言葉です。が、残念ながらインターネット空間での継承と拡散、あるいは報道に見る出来事などから、過去のものと言えない現実があります。そのひとつの例を挙げます。あらかじめお断りするのは、政治的な主義主張、党派的なものや、その方の全体を批判するつもりはありません。その報道を見て人権に関わる仕事をしている者として感じた思いをお伝えできればと思うのみです。

2019年、マスコミ界出身で、全国的に名前が知られ、国会議員になる意欲もある方が、自身の講演で、被差別部落の方々に関するお話を盛られ、その内容の間違いに多くの方が気づいて批判の声があがり、発言の釈明と撤回をされました。「無知であった」と…。報道を観られた方もあるかもしれません。講演のその部分を要約すると「江戸時代には士農工商の階級の下に、人間外と設定された集団(被差別部落の方々の意)があった。そして犯罪を犯す。サムライの家を集団で襲って来た。彼らは犯罪のプロである。立ち向かっても殺されると分かっているが、妻子を守るためにサムライは刀を抜いた…。」表面的に言葉で流せば泣ける物語かもしれません。(注:そうした史料はありません)

しかし、まったく意味が分かりません。転記していても気が滅入ります。その頃、ネットに流された動画を実際に観ましたが、放送禁止用語が飛び出し、更に話のトンデモ飛躍があります。論理の破綻もあります。被差別部落が犯罪のプロ集団として一般に知られていたのであれば、所在も明らかです。火附盗賊改方(ひつけとうぞくあらためかた)により一網打尽、被差別部落と呼ばれるような場所が残っているはずがないのです。

【現在の研究成果では】

本当の歴史は、この話と真逆で被差別部落の人々が強いられた役務のなかに、警察、刑務があります。「正義と治安を守っていたのですよ！」と、素朴には申しません。犯罪者に立ち向かう、しかも刀や銃は与えられず、十手とサスマタぐらいで相対するのです。刑の執行役も強いられました。誰もそんな危険なこと、精神的にも重すぎる役目に関わりたくないから、被差別部落の人々に押し付けたのが実態だと思います。

また「士農工商と、その下」という身分制度は、確かに私が学んだ昔の教科書に載っていました。しかし、その後の研究で存在しなかったことが明らかにされています。士(武士)は上位ですが、下には町民と農民が並列しているだけ。被差別部落の方々はその枠外であったというのが現在主流の研究成果で、今の教科書はそうした説明です。ここも古い知識のままに、その方が公言された部分です。歴史観、歴史認識は研究によって日々変化しています。新しい史料史実、考察と分析によって。「士農工商」が教えられた当時は、部落差別の構造をとってもシンプルに集約して言い切ることができて便利なので、盛んに利用された論法でした。江戸幕府の階級設定による人民の分断と相互監視の統治システムが、部落差別を生み、その名残りが今もあるのだ、という説です。江戸幕府を悪役にして思考は停止です。今の研究ではそう単純に捉えられてはいません。起源についても様々な理由により農耕を主流とした多数派が形成する社会の枠外におられた方が、次第に制度的差別を受けることになった、などいろいろな学説があります。明治政府による身分の「解放令」は大きな希望をもって迎えられたにも関わらず、それまである程度漠然としていた差別を結果的に強化した、というのも現在、多くの歴史分析で言われています。従事を強いられたことで独占的に営んでいた産業に外部からの参入が始まり、収入は減り、元来農地は僅かで、貧困に陥った。そして、経過的な救済措置もなく、新たに課税され兵役も課せられる。そのうえ差別はいつこうになくならない。ここから被差別部落の困窮と苦難は更

に深まったとも言われています。江戸幕府にすべての部落差別の根源を求めるのは、学問的には、かなり厳しいかも、ということです。近年、明治期へのロマンティックな回帰論、復古論が台頭している（これに同意しがたい方は、過去の亡霊がたくさん彷徨（さまよ）っている、とか表現されます）とは感じています。光と影は、どの革命にも伴っているように思っています。歴史の評価は繰り返し検証されなければなりません。

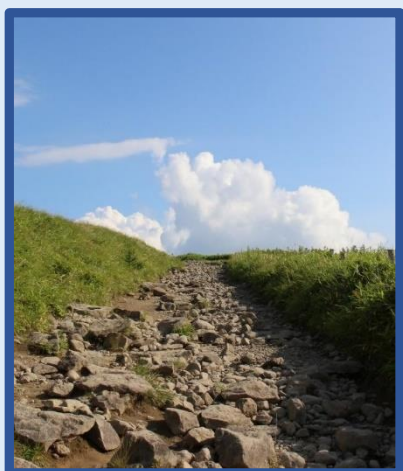
【残念ながら解消していない、としか言えない】

脱線してすみません。話を元に戻します。私はマスコミによく登場され影響力のあるこの方が、誤った知識で、論理の破綻をもろともしない強い表現者であることに、そして多くの方の前で力説された先述の内容に、トラウマ（心的外傷）を持っています。部落差別は解消してないじゃないか、としか言えません。

「部落差別はもうない」と言いたいのですが、事例に触れると、やっぱり言えません。この案件はごく一部に残る差別だとは思いますが、まだこうしたことが現実に起こります。部落差別が未だ解消されていないという気づきや、解消に向かう努力は誰もが続けていかなければいけないと思うしかありません。

【無知である自分を知ること】

それから、私は「無知」であることが問題の本質ではないと思います。「自分が無知であること」を「知っていること」が大切なのではないかと思います。自分の知っていることが全てではないという前提で謙虚であること。自分の狭い知識、それを基にした憶測、先入観を過信することは、言動の誤りに繋がって、誰かの心を傷つける結果になりがち。気をつけたいと思います。



(了) R 2.7.28

👉 私たちはまだ「坂の上の雲」を掴んではおらず、石ころだらけの坂道の途上にあると思います。

(注:「坂の上の雲」は、明治の日本を描いた司馬遼太郎氏作の歴史小説)